

再考—水に書かれたキーツの詩

石 川 源 一

はじめに

本論はキーツ作品に登場する流動体、主に水について考察しながら、彼の墓碑銘“Here lies One. Whose Name was writ in Water.”に対する新たな解釈を提示するものである。キーツ作品に登場する水に焦点を当て、その作品を書いた時期にキーツを取り巻く環境・彼の心境にどのような変化があったのか、またはどのような影響を外的要因から受けたのかを考察することで、彼が水をどのような存在として取り扱ったのか、そして水からどのようなイメージを受けたのかを明らかにする。その際、各時代のソネットを中心に考察する。ソネットを中心に考察する理由は、Endymionのような既に物語の基盤が設定されている作品では、キーツが各作品の世界観を大きく崩す事なく彼自身の声や考え方を意図的に表出させない注意を払っていると考えたためである。

1. 人類と水

キーツの作品における水を考察する前に、人類における「水」とは何を表してきたのかを考察したい。Eliade (1974) は宗教学の観点から、「水は潜在的形質の全体を象徴している。水は源泉にして起源であり、あらゆる存在の可能性の母胎である」と表現し、水が象徴するものを次のように述べている。

水は形の定かでないもの、潜在しているものの原理として、あらゆる宇宙顕現の原基として、あらゆる芽生えの容器として、一切の形が発生してくる原初の物質を象徴している。 エリアーデ著作集, p.58

水は万物の母体、そこにはあらゆる潜在的形質が存在しており、あらゆる生命の芽が繁茂している。 エリアーデ著作集, p.64

エリアーデが表現する水のイメージを基盤として作られた神話や伝説は数多く知られるところである。水は生命の原基、創造、溶解、浄化、再創造というイメージを持つと同時に、これらの一連の過程を「繰り返す一つの循環構造」として捉えた場合、その歴史は旧約聖書から現

代まで脈々と受け継がれるものである。そして水そのものの信仰に関しても、聖なる価値と、泉や川が持つ独自の性質に基づいていると考えられる。

水は流れ、水は生きており、水は動いているものである。水は靈感を与え、癒やす。泉や川はそれ自体として、力、生命、持続性を顕示している。泉や川は存在し、そして生きている。 エリアーデ著作集, p.75

生命体にとっての水とはそれらの生命を維持するために必要不可欠な物質としての存在意義を持つと同時に、人類にとっての水は上記のように神の存在を感じることでできる象徴と定義付けられた存在なのである。

2. 1817年以前のキーツと水

まず1817年に出版された“Poems”（本論では1817年詩集と呼ぶ）以前の作品群における、水をイメージさせる表現を探す。最も直接的かつ水のイメージを想起させる表現が多用されている作品は *Fill for me a brimming bowl* であろう。この作品は Vauxhall で一目見、恋に落ちた女性を何とか忘れようという意志を表明するものである。まだ18歳にもなっていないキーツが女性を忘れようとする様子が以下のような文章で表現されている。

Fill for me a brimming bowl,
And let me in it drown my soul:
But put therein some drug designed
To banish woman from my mind:
For I want not the stream inspiring
That fills the mind with fond desiring;
But I want as deep a draught
As e'er from Lethe's waves was quafft,
From my despairing heart to charm
The image of the fairest form
That e'er my reveling eyes beheld,
That e'er my wandering fancy spell'd.

Fill for me a brimming bowl, ll. 1-12,
下線は筆者による

8行目でキーツは Lethe 川を登場させ、自身の体験を完全に忘れ去ってしまいたいと切望する。英文学に度々登場する Lethe 川とは、“A river in Hades, the water of which produced, in those who drank it, forgetfulness of the past. Hence, the ‘waters of oblivion’ or forgetfulness of the past.” (OED) と説明があるように、黄泉の国 Hades に存在する川であり、その川の水を飲んだ者は完全な忘却を体験することが可能である。

当時18歳に満たないキーツは女性という存在をあまりに神秘的なものとして扱っていたことを伺い知ることができ、これに続く13行目以降の “In vain!—Away I cannot chace …” には彼の自分自身に対する罪悪感さえ感じ取ることができる。この1817年詩集以前に登場する流動体は water、wine、stream、spring などを見ることができるが、各単語に多くの含みを持たせてはいない。1819年詩集などに数多く見られるキーツ独特の「一つの単語に含みを持たせる」ように緻密に詩を作りこむわけではなく、この時期の彼の表現法は非常に一面的である。キーツの代表的な詩作に見られる二面性（‘halfness’）をこの時点では未だ見ることはできない。この年代におけるキーツ作品中の流動体は、一つの作品の中で相反するイメージが変容することのない、一貫して独立したイメージを持つものとして登場する。まだこの時点では彼が詩作を始めて数年であるという状況を鑑みるに、比較的詩作を行う上での心理状態は穏やかであり、彼の中から沸き起こる衝動に対して率直に言葉を紡ぎ詩作を行っているという印象を受けるものが多い。この後 Leigh Hunt と出会い、Cockney School の中で頭角を表すキーツの中で、詩に登場する水にどのような変化が起こるのか。

3. 1817年詩集における水の変容

次に取り上げるのは、1817年詩集の中で特に重要視される *I stood tip-toe upon a little hill* と *Sleep and Poetry* の二つである。*I stood tip-toe upon a little hill* の中で流動体の存在を思い起こさせる表現は、計19箇所にもものぼる。この作品はキーツ作品の中でもそれ自体の行数の多さも特徴的であり、それはキーツに起こる vision 体験を表現するためのものであることは既に様々な研究者たちによって語られてきた。それ故この作品に登場するキーツの目に広がる世界は、むせ返るほど濃厚な色使いや多くの鳥類がさえずる声に溢れ、この詩を読んでいる者の想像力へ訴えかける。次の箇所はキーツが見ている世界がどれほど美しく、生命力に溢れているかを表現したものである。

O Maker of sweet poets, dear delight
Of this fair world, and all its gentle livers;

Spangler of clouds, halo of crystal rivers,
Mingler with leaves, and dew and tumbling streams,
Closer of lovely eyes to lovely dreams,
Lover of loneliness, and wandering,
Of upcast eye, and tender pondering!

I stood tip-toe upon a little hill, ll. 116-122,
下線は筆者による

What first inspired a bard of old to sing
Narcissus pining o'er the untainted spring?
In some delicious ramble, he had found
A little space, with boughs all woven round;
And in the midst of all, a clearer pool
Than e'er reflected in its pleasant cool,
The blue sky here, and there, serenely peeping
Through tendril wreaths fantastically creeping.

I stood tip-toe upon a little hill, ll. 163-170,
下線は筆者による

この二箇所における流動体を表す単語に共通しているのは、crystal, clear, untainted に見られる、透き通って汚れない様を表す形容詞である。これらの形容詞は、まだ何者にも染められていない自分自身を表現するキーツの内なる声ではないだろうか。Leigh Hunt へ送ったことで知られるこの1817年詩集では、キーツは透明感のある、生命力に満ち溢れた自然を詩作のモチーフとして利用し、「私はまだまだ経験も知識も浅い若輩者です」という師と世間への宣言と、詩人として今後大成したいという彼自身の決意表明を行っているように受け止めることもできる。

そして同詩集に収められたもう一つの作品 *Sleep and Poetry* の中では、*I stood tip-toe upon a little hill* と非常に対照的とも言える現象が起こる。それは以下の箇所に見ることができる。

The visions all are fled—the car is fled
Into the light of heaven, and in their stead
A sense of real things comes doubly strong,
And, like a muddy stream, would bear along
My soul to nothingness: but I will strive
Against all doubtings, and will keep alive
The thought of that same chariot, and the strange
Journey it went.

Sleep and Poetry, ll. 155-162, 下線は筆者による

Disturbing the grand sea. A drainless shower
Of light is poesy; 'tis the supreme of power;
'Tis might half slumb'ring on its own right arm.
The very arching of her eye-lids charm

A thousand willing agents to obey,
 And still she governs with the mildest sway:
 But strength alone though of the Muses born
 Is like a fallen angel: trees uptorn,
 Darkness, and worms, and shrouds, and sepulchers
 Delight it; for it feeds upon the burrs,
 And thorns of life; forgetting the great end
 Of poesy, that is should be a friend
 To sooth the cares, and lift the thoughts of man.
Sleep and Poetry, ll. 235-247, 下線は筆者による

An ocean dim, sprinkled with many an isle,
Spreads awfully before me. How much toil!
 How many days! what desperate turmoil!
 Ere I can have explored its wilderness.
 Ah, what a task! upon my bended knees,
 I could unsay those—no, impossible!
 Impossible!
Sleep and Poetry, ll. 306-312, 下線は筆者による

これら水のイメージを持つ単語に接続している言葉は、muddy, disturbing, dim, awfully など *I stood tip-toe upon a little hill* に使われた澄み切った形容詞とは対局的、ネガティブ且つ淀んだイメージを持つものである。*I stood tip-toe upon a little hill* が書かれたのは1816年12月頃、そして *Sleep and Poetry* が書かれたのが同年8月から12月頃と推測されている。ほぼ同時期に書かれたこの二つの作品を比較すると、なにゆえこのような水のイメージに差が出てしまったのだろうかという疑問が浮かぶ。まず要因として考えられるものは、*Sleep and Poetry* は書かれた期間が長期間なのに対し、*I stood tip-toe upon a little hill* は1816年の夏以前の段階で完成していたということである。*Sleep and Poetry* はハントとの交流の中で構想を練り完成を迎えたということから、それまでのキーツ詩作と異なる、現実世界への意識が非常に強い作品だと言える。いつまでもロマンスの世界に留まらず、現実世界を視野に入れなければならないとキーツが自分自身に語りかける姿がそこに見受けられる。キーツはハントから様々な知識を学び彼なりにそれらを解釈した結果、彼はこの世の中が明るい希望に満ち溢れたものばかりではないという結論を導き出す。その背景には、彼がガイズホスピタルで働いた経験が影響を及ぼしたことは明らかであろう。彼の現実を見る鋭い目が意識的、無意識的に関わらずハントという外的要因によって開かれたことで、この作品における流動体を形容する表現は暗く、荒れ、淀んだものとなってしまった。

I stood tip-toe upon a little hill はキーツのビジョン体験を語る作品として良く知られ、友人クラークに送った手紙の中ではこの詩を Endymion と呼んでいる。そし

て彼がビジョン体験をする際、そこに介在するのは澄んだ水である。これは詩的靈感を蓄えた澄んだ水がヒポクリーネの泉から湧き出るといふ、芸術的活動を行う者にとって最も重要な存在だという知識をキーツが知っていたという証拠として考えることができる。古典神話、チャーサーやスペンサーの作品に親しんでいたキーツであれば、この水無くしてビジョン体験や創作活動はできなかったはずである。

そのためこの作品は *Sleep and Poetry* と同時期に書き終えられた作品であるにも関わらず、1817年詩集の最初に置かれたのではないだろうか。そもそも1817年詩集はハントへ送るために刊行されたものであるため、詩集全体の作品の並びがキーツの意識の変容を表しているといっても過言ではない。彼は透明度の高い水を利用し、想像の世界で自身の感覚器官を刺激するものを巧みに文字で書き起こし詩の世界の先人達に所信表明を行う。そして徐々に悲痛な出来事の多い現実の世界へ目を向けることで、彼の身体を満たしていた水は少しずつ濁っていく。

4. 変容していく水の存在

次に1817年詩集からエンディミオンにかけての時期に書かれた詩の中で流動体、特に水に関係する単語に着目していくと、ひとつの作品中に登場する水に関わる表現が徐々に減少していることに気づく。最初の ode と言われる *Ode to Apollo* においても、下記の一箇所にしかならぬ登場しない。

The Pleiades were up,
 Watching the silent air,
 The seeds and roots in the earth
 Were swelling for summer fare,
The ocean, its neighbor,
 Was at its old labor,
 When—who, who did dare
 To tie like a madman thy plant round his brow?
 And grin and look proudly,
 And blaspheme so loudly,
 And live for that honor to stoop to thee now,
 O Delphic Apollo!

Ode to Apollo, ll. 25-36, 下線は筆者による

この作品では、それまで詩人として大成してやろうと野心に満ち溢れていた若者キーツが一旦冷静になり、詩の神であるアポロに向けてあまりに大それた宣言をしてしまった自身の愚行に対しての許しを請う姿が見て取れる。この作品が書かれる前、彼は Laurel Crown、すなわち桂冠詩人を題材にした作品を三つ立て続けに

完成させている。特に1816年の終わり頃に書かれた *On Receiving a Laurel Crown from Leigh Hunt* では、戯れにハントから月桂樹の冠を自身の頭に載せてもらったキーツは、訪れた来客の前でもその冠を脱ごうとしないという愚行を行ってしまう。この時若干19歳のキーツにとって、この行為はあまりに無礼なものであるということはキーツ自身にももちろん自覚があったため、その直後に *Ode to Apollo* を執筆することになる。詩の神であるアポロを心から崇拝しているからこそ、自分自身をどれだけ愚かなものか、やや過剰とも言える言葉遣いで謝罪を行うのがこの作品である。

その後にかかれた、彼のギリシア美術体験を語る *On Seeing the Elgin Marbles* の中でも、水を表す表現は一箇所のみである。

Such dim-conceived glories of the brain
Bring round the heart an undescribable feud;
So do these wonders a most dizzy pain,
That mingles Grecian grandeur with the rude
Wasting of old time—with a billowy main—
A sun—a shadow of a magnitude.

On Seeing the Elgin Marbles, ll. 8-14,
下線は筆者による

人間としての mortality を受け入れざるを得ない詩人キーツに対し、ギリシア芸術のエルギン・マールブルは immortality の象徴として彼の眼前に立ちはだかる。芸術の前では、自身の理想などが抗えるほどの力もなく、ただただ見入ってしまう彼の姿が表現されている。しかし次に書かれた *On a Picture of Leander* では、それまでの現実的で冷静なキーツは見られない。それはどちらかと言うと、初期作品に見られるようなロマンティックで力強いキーツが姿を現す。

Come hither all sweet maidens soberly
Down-looking—aye, and with a chasten'd light
Hid in the fringes of your eyelids white,
And meekly let your fair hands joined be,
As if so gentle that ye could not see,
Untouch'd, a victim of your beauty bright,
Sinking away to his young spirit's night,
Sinking bewilder'd 'mid the dreary sea:
'Tis young Leander toiling to his death;
Nigh swooning, he doth purse his weary lips
For Hiro's cheek, and smiles against her smile.
O horrid dream—see how his body dips
Dead-heavy—arms and shoulders gleam awhile—
He's gone—up bubbles all his amorous breath!

On a Picture of Leander, ll. 1-14, 下線は筆者による

彼は現実の世界で詩作に耽る日々を描き出す時、水が濁っていくような表現を用いる。年月とともに水はその不透明さを増していくが、こういった濁っている様子を表す単語は意識的に用いられたのだろうか。ガイズホスピタルで働いていたキーツは医者という立場から現実世界を見続け、そして自身の治療の甲斐なく病魔に負け命を落としていく患者たちを見てきた。その中で詩という理想の世界を見つけたことで、疲弊しきった彼自身の心を癒やすためにも医者という立場を捨て詩作に没頭するようになった。しかしながら、そこに待ち受けていたのは医者の頃と同じように、現実世界を悲観する彼自身の冷静な観察眼が見る苦悩に満ちた世界だった。その世界を見る過程の中で彼の心は徐々に濁り始めた。彼は詩的靈感を与えてくれるヒポクリーネの泉から湧き出す澄み切った水を飲み、自身の体内に淀み続ける濁りを浄化しようとしていたのではないだろうか。この考えを裏付ける可能性のあるものに、D'Avanzo (1967) のこのようない節がある。

If the fountain emanating from the muses analogizes creative, poetic power, the metaphor of the radiant, overflowing fountain figures the divine overflow of truth. This significant linkage of the metaphors of light and the fountain can be found in Lycius' description of Lamia, who, like Cynthia, excites the poet to powerful exercise of imagination and provides him with a vision of truth.

Keats's metaphors for the poetic imagination, Ch. 5, p.131

D'Avanzo が指摘する際に例として挙げているのは *Lamia* ではあるが、キーツが fountain という言葉を多用する理由を裏付けるものとしては十分であろう。詩的靈感を得るために、泉から湧き出る澄み切った水を飲み続けるキーツではあるが、同時にその水は真実を見る力さえも増幅させてしまう。その結果、彼の現実意識は詩作を繰り返すほどに高まっていき、彼自身を満たしていた水を徐々に濁らせてしまう。

そしてキーツはその短い人生の中で、年月を経るほどに己の詩の中でワインを登場させる回数が増える。ワインは人を酔わせることで現実意識を僅かの間忘れさせてくれる作用を持つ。しかし彼の喉を潤し、彼の魂をいつの間だけ癒してくれる美酒は、その代償としてキーツの過剰とも言える安楽死願望をくすぐり、彼を翻弄する魔の側面を垣間見せる。キーツ晩年の作 *Ode to a Nightingale* では、彼が現実からの逃避行動と想像の世界へ飛び立ちたい願望を持ちながらピンテージのワインを求める様子と、美酒の魔力を自分からなんとか遠ざけようとする様子が生々しく描かれている。

O, for a draught of vintage! that hath been
Cool'd a long age in the deep-delved earth,
Tasting of Flora and the country green,
Dance, and Provençal song, and sunburnt mirth!
O for a beaker full of the warm South,
Full of the true, the blushful Hippocrene,
With beaded bubbles winking at the brim,
And purple-stained mouth;
That I might drink, and leave the world unseen,
And with thee fade away into the forest dim:
Ode to a Nightingale, ll. 11-20, 下線は筆者による

Away! away! for I will fly to thee,
Not charioted by Bucchus and his pards,
But on the viewless wings of Poesy,
Though the dull brain perplexes and retards:
Already with thee! tender is the night,
And haply the Queen-Moon is on her throne,
Cluster'd around by all her starry Fays;
But here there is no light,
Save what from heaven is with the breezes blown
Through verdurous glooms and winding mossy ways.
Ode to a Nightingale, ll. 31-40, 下線は筆者による

この描写において、彼はヒポクリーネの泉から湧き出る水をワインと同一視している。しかし彼の喉や詩的想像を潤す水は一時的な魔力を持つワインではない。現実世界に生きているキーツにとって、空想の世界に存在するヒポクリーネの泉から湧き出す水を飲むという行為が不可能なことを、彼は既に明白に理解していたのかもしれない。その結果として、一時的にでも酩酊し快樂を味わわせ、この世の苦痛を感じずに済む効果をもたらしてくれる現実世界のワインを求めていたのではないか。

しかしその現実から逃避する願望に対して彼が女性について思いを巡らせる時、詩の中に登場する流動体は荒れ狂うものにも姿を変えてしまうものの、透明度の高さは変わる事がない。この際の流動体が示唆するものは、彼の女性に対する純粋な心を透明度に例え、女性への情熱的な衝動を表現しているのではないか。彼は1818年に出会い、後の婚約者にもなる Fanny Brawne に出会うと、彼女への手紙の中に詩を書き彼女へ贈る。

Bright Star! would I were steadfast as thou art!
Not in lone splendour hung amid the night;
Not watching, with eternal lids apart,
Like nature's devout sleepless hermit,
The morning-waters at their priestlike task
Of pure ablution round earth's human shores;
Or, gazing on the new soft fallen mask

Of snow upon the mountains and the moors:—
Sonnet, ll. 1-8, 下線は筆者による

この詩は一般的に Bright star ソネットと呼ばれているものだが、ここで使われている the morning-waters は、読むものに透明度の高い水を想起させる。しかし別の手紙においてキーツは引用ではあるものの彼女に宛てた手紙の中で強い含みを持つ可能性のある流動体を用いる。

To see those eyes I prize above mine own
Dart favors on another—
And those sweet lips (yielding immortal nectar)
Be gently press'd by any but myself—
Think, think Francesca, what a cursed thing
It were beyond expression!
Letter to Fanny Brawne, July 1, 1819,
下線は筆者による

この nectar という単語は OED によると “The drink of the Gods” と説明される、神々が飲む甘美な液体という認識ができる。しかしそこには非常に重要なもう一つの意味があることを決して見落としてはならない。それは “Any delicious wine or other drinks” である。最愛の恋人に送る手紙に、この nectar という単語をキーツが無意識に登場させてしまったとは考えにくい。Fanny の愛が彼にとってあまりにも甘美なものだったことは彼の残した書簡を見れば言うまでもないが、その彼女の魅力ゆえに一度酔いしれてしまうと身を滅ぼすかもしれない側面を持ち合わせていることは、彼自身十分に理解できていたのだろう。尚且つ nectar を形容する単語として immortal が用いられていることも注視しなければならない。永続性を表す形容詞を用いることで、nectar が永久に喉を潤す甘美な液体を表す面と、永久に彼女の愛に酔いしれてしまう自分の姿を表す面と、表裏一体のものとして読むものに連想させてしまう。nectar という一つの単語を取り上げた上でこのような解釈をするのは邪推である可能性も否めないが、キーツが最愛の女性に宛てた手紙に、わざわざこのような文章を引用した理由を「甘美なものの象徴」だと容易に言い切ってしまうのは甚だ危険である。前述している通り、彼は時間の経過と共に、外的要因によって徐々に現実意識が高まりゆく中でワインの魔力に取り憑かれてしまっていたと考えるのが妥当であろう。そしてその過剰な現実意識の高まりを助長したものは、彼の極端な二面性であるほかない。

5. キーツの墓碑銘

ここまでキーツ作品に登場する流動体、主に水に関する

る考察を述べた。以上のことから、彼は流動体、特に水を意識的に詩の中で用いてきたと考えられる。ここで再度エリアーデの言葉を借りるならば以下のようなイメージを言葉の背後に潜ませていたのかもしれない。

水との接触は、常に再生を含意する。それは一方で、形の解消が「新しき誕生」を伴っているからであり、他方で、水に浸すことは、生徒想像の潜勢力を増殖させるからである。水は加入儀礼によって、「新しき誕生」を与え、呪術的儀礼によって癒やし、葬送儀礼によって死後の世界を確保してくれる。 エリアーデ著作集, p.59

水がどのような宗教的枠組みに入っているとしても、水の機能は常に同一である。ずなわち、水は形を解体し、廃棄し、「罪を洗い清める」—清めると同時に再生させる。水の氏名は「創造」に専攻して「創造」を再吸収することであるが、水はけっしてそれ自信のあり方を超越することはできない。つまり、形をとってあらわれることはできない。水は潜在性、萌芽、潜勢力、という条件を克服することはできない。 エリアーデ著作集, p.92

キーツが詩作に用いた水が持つ役割は、初期作品では自然の持つ生命力の表れや創造への過程、彼自身の詩人としての純粹さを水の透明度を用いて表す道具の一つであった。しかし時間の経過と彼自身と取り巻く外的要因の変化とともに現実意識が高まってしまったため、彼は理想郷の水よりも現実世界に存在するワインに溺れ、彼の体内を満たす水を自分自身で濁らせてしまう結果となった。改めてキーツの墓石に書かれた文面「その名を水に書かれし者ここに眠る (“Here lies one whose name was writ in water”）」を読み返してみると、この

水は単純な液体としての存在以外の何かとして見ることもできる。彼の名が書かれた水は、それまでキーツが作品に散りばめてきた彼自身の純粹さを表現するものなのか、ヒポクリーネの泉から湧き出る想像力の源なのか、もしくは再生を願うものなのか解釈は様々であるが、「流れてしまえば影も形も残らない儚いもの」だと単純に結論付けることは非常に難しい。

Bibliography

- Ad de Vries. *Dictionary of Symbols and Imagery*. North-Holland Publishing Company, 1974.
- Becker, Michael G., Dilligan, Robert J., Bender, Todd K., ed. *A Concordance To The Poems Of John Keats*. New York & London: Garland Publishing, 1981.
- Bush, Douglas. *John Keats: His Life and Writings*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1966.
- Bowra, C. Maurice. *The Romantic Imagination*. Oxford: Oxford University Press, 1950.
- Cox, N. Jeffrey, ed. *Keats's Poetry And Prose*. New York, London: W. W. Norton & Company, 2009.
- Eliade, M. *Traité d'Histoire des Religions* (1963) : 久米博訳『エリアーデ著作集第二巻』せりか書房, 1974.
- Gittings, Robert, ed. *Letters of John Keats*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1975.
- Pollard, David, ed. *A KWIC Concordance to the Letters of John Keats*. West Sussex: Littlehampton Press, 1989.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *The Letters Of John Keats*. Volume One, Two, Cambridge: Harvard University Press, 1958.